

物性研究・電子版の第1号発行が2012年5月のことですので、すでに3年経ったことになります。それからさらに1年前の3月11日を時間軸の起点のように感じてしまうのは、仙台にいるからなのかもしれません。人の記憶の時間スケールは75日なのだなあ、などと感じながら、変わってゆくものと変わらないものが混在する中で過ごしています。各地編集委員とは言っても、ほとんど編集に寄与することはなく、名ばかりの編集委員ではありますが、編集後記を書く機会を頂きましたので、普段感じていることを記しておきたいと思います。

「わかってしまえば当たり前のことなだけどね」

大学院生のときの恩師が話の節々に言っていた言葉を、時折思い出します。例えば、教科書を読み進めると、一見難解な公式や概念に出くわしますが、公式中の記号や用語の意味がわかると、特段高尚な事柄が述べられていたわけではなかったのだと、少し拍子抜けしながら、先に読み進められることがあります。「わかってしまえば当たり前のこと」を感じる一面です。または、馴染みのない研究会などに出席すると、講演が難しく感じられることが多いものですが、単にターミノロジーの問題で意味が取れないということも少なくないようです。後になって直接話を聞くと、知っている概念に耳慣れない用語が用いられていることに気付かされて、改めて内容を考えてと理解が進むことがあります。これも、「わかってしまえば当たり前のこと」なのですが、そのプロセスは容易ではありませんから、異分野コミュニケーションの大切さが説かれるのでしょう。

新しい研究テーマに取り組むとき、うまく解決できるだろうかといった不安を感じながらも、今後の発展に胸が躍ります。これまでの理論でうまく説明出来ない現象に対し、色々なシナリオを勝手に想像します。もしかしたら一大発見に繋がるか、などと妄想するかもしれません。しかし、研究を進めると、なんのことはない、従来の理論が単純化しすぎていたために見逃していた事柄が、実は重要であった、などということも良くあります。当初の推論など結局は見当違いに過ぎなかったのですが、そんなこともすっかり忘れてしまい、ともすると、つい先日知り得た事実をとうの昔から知っていたような気にすらなっています。読みが浅いと言われればそれまでですが、そんなものです。得られた結果は当たり前かもしれませんが、当たり前だからこそ説得力があるはずですし、そもそも、当初は誰も知らなかったことです。このような研究のプロセスを振り返ると、わからないことを、「わかってしまえば当たり前のこと」にするために研究をしているのだなと改めて感じるのです。

(W.I.)